ひぐらしのなく頃に　最語

八石マムミラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひぐらしのなく頃に　最語

【Ｎコード】
Ｎ１５２６Ｄ

【作者名】
八石マムミラー

【あらすじ】
世界はオヤシロ様から救われたと思っていた。しかし、オヤシロ様は悪ではなく、世界を救う１つの希望だったのだ。真の悪は世界からいくつかの強力な力を持つ生物を手下とし、世界の頂点に君臨しようとしていた

プロローグ

鷹野三四(たかのみよ)はいくらかの手下を従えた。
カオス、皇帝、魔王ザンデ、くらやみのくも、ゼロムス、ケフカ、セフィロス、その他諸々。
そしてファイナルファンタジーシリーズの主人公達を皆殺しをしたはずだった。

鷹野はカオス、皇帝、魔王ザンデ、くらやみのくも、ゼロムス、ケフカ、セフィロスと山狗(やまいぬ)の全員で世界征服するのが目的。
全ての世界で神になりたいのだ。

圭一はとある洞窟に、竜宮(りゅうぐう)レナ、北条沙都子(ほうじょうさとこ)、園崎魅音(そのざきみおん)の3名はとある工場に来てしまった。

圭一の来た洞窟には三四の手下のランドタートルが、工場には鷹野の手下のガードスコーピオンが、巣くっている。
その場所から脱出し、合流できるか……

そして、物語は始まる―――

第1章　ハジマリ（前書き）

始まりました。ひぐらしが

第1章　ハジマリ

俺は圭一、前原圭一(まえばらけいいち)。
気がつくとこの洞窟にいた。

装備品はエクスカリバット、源氏の盾、皮の帽子、黒装束である。
この洞窟に来た時、俺はリボンもつけていたが、リボン1つじゃ、防御力も無い。
その為、宝箱に入っていた皮の帽子で防御力を上げる事に。
リボンはステータス異常にならない効果もあるかもしれないからな・・・

ゴブリン「ケケケッ」

3体の小悪魔(ゴブリン)が俺の前に現れた。
ゴブリンは耳が尖がっているのが特徴だ。

ゴブリン「お前は殺されちゃえっ、キキッ――」

敵が現れたので戦うしかないようだ。
さすがに俺は死にたくないからな。

俺はバットでゴブリンへ打つ。

金属のバットだが、一撃では倒せないようだ。
所詮はただのバット。ゴブリンの攻撃は2匹分は源氏の盾で守る。

しかし、残りの1体の攻撃を喰らった。黒装束を装備していたから
ダメージは少なめで済んだ。

俺は力をためる。ゴブリンの攻撃は盾で守る。
そしてためた力でゴブリンに攻撃。ゴブリンを倒す

圭一「シヴァ召喚！！！」

俺はシヴァを召喚した。
シヴァはダイヤモンドダストを放つ
輝くダイヤモンドのような氷が散り、敵全員を襲い掛かる
そして、ゴブリンを全滅させた…

＊　＊　＊

その頃……
圭一が洞窟でゴブリンとの戦闘をしている頃。
工場を進んでいる3人の少女がいた。
竜宮（りゅうぐう）レナ、北条沙都子（ほうじょうさとこ）、園崎魅音（そのざきみおん）の3人である。

レナ「この釘お持ち帰りぃー、この鉄お持ち帰りぃー」

レナは地面にある釘、鉄もかぁいいと思っているらしく、お持ち帰りしたくなっていた。
何故、レナがいつもお持ち帰りしたいのかは、レナの悲惨な過去があるからである。
その話は、別の機会ですするとしよう。

魅音「ダメだよレナ。これらは工場の大切なものだからさ。おじさんも謝らなきゃいけないかもしれない」

この人は魅音。緑色のロングヘアーをポニーテールにしており、園

崎家の人間だ。
部活の部長だけあり、このメンバーでリーダーをすぐ務めるほど。
テンションも高く、突っ走る女でもある。

沙都子「この工場廃坑ですわ」

この子は沙都子。金色のショートヘアーにカチューシャをつけている。
また、他の二人は中学生だが、この子は小学生でちびっ子。

そう、この工場は廃坑。誰も人がいなくて機械モンスター達の巣である
人がいないだけ、改造された人型ロボットはいる。
それは戦闘員と呼ばれる者。３体も襲ってきた。

レナ「私のムーンアクスで貫く、そしてお持ち帰りぃー」

レナはムーンアクスで戦闘員を切り裂いた。
戦闘員は倒れた。

沙都子「私も攻撃ですの」

沙都子の攻撃。沙都子は素手で戦う。運動神経は意外と高いとは言え女の子。
力も余り無く、少し相手を痛めることができた。

魅音「おじさんの短剣は強いよ。」

魅音は短剣で戦闘員達へ攻撃した。
戦闘員はみんな、倒れた。

こうしていると、レナたちの前に1体の蜘蛛の機械が現れた……

ガードスコーピオン「オマエラをコロス！！！」

そのころ、圭一もゴブリン達を倒し進み、奥深くまで進んでいた

ランドタートル「前原圭一よ、私に勝てるかな！！！！」

圭一「良い度胸だ。カメェ！！！俺が完膚無きに倒してやる！！」

第2章　【主】（前書き）

今回はランドタートルやガードスコーピオンと戦います。
圭一たちは果たして勝てるのか…

第2章　【主】

俺はこの相手に苦戦していた。
いくらエクスカリバットで攻撃してもダメージを与えられる事は少ない。
ミスが多すぎるのである。

ランドタートル「この程度でわしを倒すきか、坊主！」

圭一「うるせぇ。俺は本気を出しているんだぞ！！！」

俺は攻撃をするが相手はかなりの熟練者である。
そのため、攻撃の回避力がかなり高く、攻撃がなかなか決まらない。
俺は相手の攻撃をいくらか受け、ポーションを飲んで回復することにした。

圭一「うぇっえ、まじぃー！！！」

ポーションはかなりまずい物だった。それを使わないと回復できないから仕方ないか。
俺は攻撃を与え続けたが倒せる気がしない。
今の戦略では勝てるわけが無いだろう。封印しているアビリティを何か使用するしかないな・・・・・

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

私はレナ。竜宮レナ。沙都子と魅音と一緒にいる。

GS（ガードスコーピオン）「サーチスコープ！！！」

相手は沙都子に謎の虹色の光線。特にダメージとかは無いみたいかな？かな？

レナ「ムーンアクスで攻撃しちゃうぅー」

私はムーンアクスでGSを攻撃した。ムーンアクスは錆びており、威力は少なかった。

魅音「おじさんの攻撃ターンだよ。マインゴーシュ攻撃！！！！」

魅音の短剣はマインゴーシュ。攻撃をかわしやすい効果を持つ物。威力はミスリルナイフよりは上だが魔封じの短剣よりは下。ようするに中途半端なのだよ。

沙都子「私は普通にパンチですわよ」

沙都子は素手で機械の蜘蛛へ攻撃を放った。威力は無く、沙都子の手を傷めるだけだった・・・・・・

GS（ガードスコーピオン）「銃撃！！！」

銃撃を沙都子は受け、ダメージを食らった。

私達の総攻撃を放つ。そうすると相手のサーチスコープは私が受けてしまった。それはおそらく、私が次攻撃を喰らったら相手のサーチスコープはターゲットロックオンをする技という事になる。

レナ「じゃあ、私は防御しつつ攻撃をする。」

沙都子「わたくしは相手がレナに攻撃を放つ時に通る道にトラップを仕掛けておくですわ」

魅音「私は右手にダガー、左手にマインゴーシュと言う両手持ちで戦うね。」

私達の作戦は決行される。それで私に攻撃さえるかどうか。されなかったら少しやばいかもしれないけど・・・・・・

第3話　一つの終わり（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年も小説を書きます。よろしく

第3話　一つの終わり

魅音「おじさんの攻撃ターン。」

魅音はガードスコーピオンに2つの短剣の二刀流攻撃。
傷をいくつかつけた。

レナ「私の斧の攻撃をしちゃうかな？かな？」

私はムーンアクスでガードスコーピオンの足を1本壊した。

GS「ターゲット追撃！！！！『スコーピオンテイル』」

相手は私に向かって攻撃を放ってきた。
しかし、沙都子の仕掛けた水の入ったタライが落ちてくる仕掛けがある
その仕掛けに勝手にGSは掛かった。

GSは水によってかなりのダメージを食らったようだ……

相手は尻尾を上げたみたい。

魅音「私が攻撃して一気に倒す」

レナ「まって」

かなり昔に風の神殿で戦ったウィングラプター戦の事を思い出した。
その時、相手が羽で閉じている時に攻撃を放ったら強力なカウンターを放ってきたから。

それと同じく、強力なカウンターを放ってくるかもしれない……
遅かった。魅音は相手に攻撃を放ってしまった
ＧＳ「カウンター開始！！！！！！！！！『テイルレーザー』」
相手は強力なビームを発射してきた。
私達はかなりのダメージを食らってしまった。
レナ「あはははは、リミット解除」
沙都子「リミット解除ですわよ」
私達はリミットが解除された。それだけの大ダメージを受けてしまったから
沙都子「必殺！！！！『トラップ乱舞』」
沙都子はトラップを大量を仕掛け、ＧＳの素早さ、防御を下げ、更にスロウ状態にしてしまった。
更に、その状態で魅音の攻撃を放つ。
最後は私の攻撃でトドメを刺す。あはははははははははははは
レナ「私がお前を必ず破壊する！！『ブレイバー』」
私は月斧（ムーンアクス）で思いっきり、ＧＳに斬りつけた。
ＧＳは２つに割れ、壊れた。
レナ「壊れちゃった。でも壊れてもかぁいいからお持ち帰りぃー」

私達はこの工場から離れていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その頃、俺はランドタートルとの死闘を繰り広げていた。

この戦いはミスが続き、ポーションも3つしか残っていない。
後の持ち物は１０００ギルぐらいしかない。

ギル！？あの禁アビリティの一つを使用すれば形勢逆転を狙えるかもしれない。
でもその技は禁止している物の一つ。その中でも大きく禁止なものだろう……

でも、それを使わない限り勝利は得られそうも無いはず！！！

圭一「侍の必殺アビリティのぜになげを使うしかない！！！」

そう、『ぜになげ』だ。
それは相手にギル（このせかいのおかね）を投げつけ。相手にそのお金の１割のダメージを与える大技。
お金が５００万ギルとかあった場合、無条件で９９９９ダメージを何回も使用できる。
ラスボス相手には最強の一撃だと言えよう。

しかし、相手は中ボス。そのぜになげを使用せずには勝利は厳しい。
そのため、ぜになげを放つ。勝利を得る為に……

圭一「俺の必殺技を放ってやる『ぜになげ』」

俺は相手に１０００ギルを投げつけた。
かなりのダメージを与え、相手は倒れた。
ランドタートル「わしを倒せるとはな。しかし、我らのボスはお前らの居場所を掴むだろう……」
そうしたら、謎の声が聞こえた。
――お前は世界を救え、ある者がこの世界を支配しようとたくらんでいる。
その為、ある場所に転送する。そこでお前の仲間に会えるだろう。
この世界には四人の世界を救う鍵を持つ人がいる。
クラウド、セシル、ルーネス、ティナ。その四人は世界を支配しようとした者共の手によって殺されていないはずだ。
その者達を探し出し、悪の根源を叩け。
それがクリスタルの意思だ。お前を転送しよう……
突然光が出現し、俺は砂漠へ飛ばされた。

第４話　１００年の魔女とオヤシロ様（前書き）

今回は一応梨花ちゃまが登場します

第４話　１００年の魔女とオヤシロ様

三四「これから会議を始めるわ…くすくす」

この場所は何処なのかは不明。
三四とその手下達が集まっている場所であり、会議を始めていた。
会議の内容はＧＳ（ガードスコーピオン）とランドタートルが倒された事である。

皇帝「会議としてＧＳ（ガードスコーピオン）とランドタートルが倒されたことだな」

三四「そうよ、それよ」

ケフカ「ジェノバ・ＳＹＮＴＨＥＳＩＳは絶対使いたいと思います。他には何を使うか」

三四は色々と迷い、ゼロムスの意見を聞くことにした。

三四「ゼロムス、まず貴方が考えて」

ゼロムス「じゃあ、オクトマンモス、そしてマシン・サテライトを使う」

三四「それで決定ッ！」

ゼロムスとケフカの意見だけで決まってしまった。
オクトマンモス、マシン・サテライトともに結構強いモンスター。
ジェノバ・ＳＹＮＴＨＥＳＩＳに限ってはジェノバの最終形態。最悪自爆で敵全員を倒す事が出来る。準ラスボスクラスの強力な手下であった。

◆

俺達は歩いていた。
あの町へと行く為に

レナ「レナつかれちゃった」

沙都子「私もですわ～」

魅音「おじさん、少し休憩したいな」

圭一「わかった。１０分休憩な」

俺達は砂漠のど真ん中で一休みした。
疲れて死にそうな少女が沢山いるからな。

休憩を終了し、歩いていると機械がビームを放ち、攻撃してきた。
その攻撃をかわしたが…

――あれ（機械）には邪気が感じる。

レナ「かぁいくない！！」

沙都子「不気味ですわね」

他には干からびたたこと謎の生物。

ジェノバ「『バイオラ』」

相手は緑色の泡の大群を呼び寄せた。
それを喰らったら一瞬で毒により死んでしまうだろう
何故ならば、毒魔法(バイオ)よりも威力が高い感じがするからだ
梨花「貴方達を守るわよ！！！『リフレク』」
黒いコートを全身に羽織った人が反射魔法(リフレク)を使用した。
そのリフレクの効果によって相手のバイオは反射され、相手に当たった。
梨花「貴方達、大丈夫かしら…」
この女性らしき者。背の高さからして小学生ぐらい。
沙都子や梨花ちゃんぐらいの背の高さだろう。
全身に黒いコートを羽織、黒いフードにより全身が全く見えないのでどんな姿をしているかすらもわからない。
羽入「あぅあぅ～僕の名前は羽入なのです」
この女の子は黒コートと一緒にいた子。
ライトパープルのロングヘアーに赤い着物姿。かなり萌える。
頭に2本の紫色の角が生えており、左の角に傷のようなものがあるようだ…
羽入「レナ、シュークリームくれたら戦う！」
その女の子はレナの名前を知っていた。
レナはシュークリームを羽入にあげた。

羽入「あぅあぅ、シュー美味しいのです。なので僕の力を汝へかしましょう。『真空波』」

羽入は真空波を放ち、相手を切り裂いた。
そのダメージはかなりあり、１０００ぐらいに上る

梨花「羽入と話している時にワープゲートを用意した。貴方達はそれで逃げろ。私は貴方達を死なせたくない！！！」

その少女（口調は大人）により、俺らはワープゲートに乗り、どこかに行った。

第４話　１００年の魔女とオヤシロ様（後書き）

次回は僕とボクが戦います。
羽入の強力な技。まさに魔王クラスですよ。魔王クラス！！
楽しみにしてください

第5話　僕とボク。ジェノバ・ＳＹＮＴＨＥＳＩＳとの戦い（前書き）

梨花ちゃまと羽入ははたしてジェノバに勝てるのか…

第5話　僕とボク。ジェノバ・ＳＹＮＴＨＥＳＩＳとの戦い

梨花「さすがにコートは熱過ぎるわね……脱ごうかしら」

私はコートを脱いだ。
容姿は藍色の長い髪に紫の瞳、そして白いシャツ、濃い青のプリーツスカート、リボン（ピンクの蝶ネクタイ）、サスペンダーをつけている

ジェノバ「…『「吸収」』」

相手の攻撃は体力を吸収し、かなしい状態にさせる技ね。
この程度は１００年の魔女の私にとってはなんとも無いわね

梨花「ボクの魔法を見せるのです『２％』」

２％（ニパー）。私の強力な炎魔法。威力はファイガよりも高く、フレアよりは威力控えめ。必要ＭＰはファイラレベル。
その炎で相手の吸収の効果を無効にする事が出来た。

羽入「ひれ伏すがいい、化物よ！！！『フレア』」

火炎の大爆発。それがフレア。ジェノバの右触手を潰す事に成功した。
羽入は２回行動が出来る事が多い。２回目の攻撃が放たれた。

羽入「汝らは僕達には勝てない運命！！！『柳桜閃哮』」

オヤシロビーム炸裂。その光線はオクトマンモスとマシン・サテラ

イトを消し飛ばした。
ジェノバにもかなりの大ダメージを与えたのだが、倒せていなかった。

ジェノバ「カウントダウン０『アルテマ』」

相手は究極の必殺技。アルテマを発動

梨花「私は隠れるのです。羽入、貴方に任せたのです」

私は隠れるで攻撃のダメージを０にするしか方法は無い。
しかし、羽入なら強力な技で相手の攻撃を消滅できるかもしれない

羽入「第３変形であるネオ羽入の特技をオヤシロモード（第２変形）
私が放とう…『アルマゲスト』」

相手の攻撃と羽入の攻撃は両方ぶつかり、羽入の攻撃の方が威力が高かった。
そして羽入は勝利した

羽入「これでわかったであろう。それが汝の限界です」

私と羽入のコンビネーション。悪の根源。貴方達は欠片を集めた私達を合わして倒してみせる！！！

第6話　東城つかさ登場

俺らは１００年の魔女と名乗る女の子にどこかに飛ばされてしまった。
その飛ばされた地点はどこかの森の中だった。

レナ「かぁいいもんあるかな？かな？」

レナは森の中でもかぁいいものを探していた。
しかし、この森には無さそうな気配だ。

魅音「おじさんは多分かぁいいものないと思うんだけど」

レナ「嘘だッ！！」

沙都子「トラップを仕掛けやすいですわね」

沙都子はトラップ娘。トラップを仕掛けやすいと言う事を大体考えていた。

俺たちは歩き続ける。
――すると、大きな岩で囲まれ、その真ん中は大きい空洞があった。

それはもしかして洞窟なのか？
俺は気になった。

圭一「私（わたし）、前原圭一はこの洞窟を探る事にしようと思う。レナ、沙都子、魅音は黙ってここにいるかついて来い！！！」

俺一人でいこうかと思った。しかしついてきてもらってもいいなと思ったんだ。

レナ「圭一君についていく」

沙都子「私(わたくし)も探検したいわ」

魅音「おじさんもいこうかな。部長としても待っている事は出来ないし……」

俺達全員は洞窟に入り、進んでいった。

俺は一人だけ男。みんなを守ってやらなければいけないと思う。

レナ「怖いよ、怖い」

レナも怖がっている。俺はレナを慰(なぐさ)め、どんどん進んだ

沙都子は転んで怪我をしてしまった。

沙都子「い、痛いですわ」

沙都子は泣かなかった。俺らは手当てをし、沙都子の傷を癒した。

どんどん進む。魅音は気味が悪いとかも言っていた。

俺は魅音のことも慰めて進む

クラウド「お前らは誰だ。世界を滅ぼそうとする者か！！」

進んでゆくと金髪のツンツンヘアーに青い瞳、そして大きな剣を持つ男がいた。

年齢は１７歳前後か。トミー並の筋肉と腕につけている腕輪が気に

なる。

圭一「違います。俺は世界を救えと聞かれた者です」

レナ＆沙都子＆魅音「私達は圭一くんの友達です。」

クラウド「本当かどうか、オレと勝負をするしかないな……お前らには少し興味があるしな」

そういえば、名前を聞いていなかった。
聞こうと思った。

圭一「俺は圭一、前原圭一」

クラウド「オレはうーん、東城つかさだ。」

レナ「私は竜宮レナ。嫌の『い』と言う文字は名前には無い」

沙都子「私は北条沙都子。にーにーはどこかに転校してしまったの」

魅音「おじさんは園崎魅音。よろしくね」

俺たちは自己紹介をした。
そして、俺と東城つかさとの勝負が始まる！！！

第7話　東城つかさとの戦い

クラウド「戦いは男の一対一の戦闘だ。レナさん、沙都子さん、魅音さんは今回は戦わない。」

圭一「いいだろう……勝負になるぜ」

俺と東城つかささんとの戦いが始まった！！

レナ「あはははは、圭一君頑張れ」

魅音「くけけけけけけけ、おじさんも応援しているよ」

沙都子「をーほほほほほ、私も応援しときますわ」

不気味な笑いは別として、応援してくれるのはありがたい。

俺の固有結界で攻めてやる。

圭一「俺はエクスカリバットで勝負する」

クラウド「じゃあ、オレは愛用のバスターソードで戦う！！！」

◆

詩音「チェンウイップも買ったし、お姉にでも自慢しようかな」

この人は詩音。髪を下ろしていて洋服は少し違うがほとんど見た目も声も魅音ソックリな女の子。

悟史「借りを返さなきゃいけないなぁ。エンキドゥ」

エンキドゥ「悟史様」

悟史は金髪の少年で色々と圭一に似ている。
手下としてエンキドゥと言う奴を連れているらしい。
エクスカリパーや源氏シリーズの装備、その他の剣のマニアでもある。
野球はそれなりに得意ではないが、バットも持っているようだ

そして悟史と詩音はバッタリとであった。

詩音「悟史君じゃん」

悟史「詩音さんか。」

詩音は悟史の事が大好きだ。
一緒に行く事にしたよう……

◆

圭一「うりゃああ」

俺は相手に斬りかかる
相手は巨大な剣で一振り、俺の攻撃は潰された。

クラウド「東城つかさ様の攻撃思い知ったか！！」

圭一「まだまだぁ『コメット』」

俺は隕石魔法・コメットを唱えた。

――普通黒魔法だって？

黒魔法はよく使われる万能な魔法。使わないぜ。

クラウド「少しはやるようだな…『マバリア』」

相手のこの魔法はなんだ。黒魔法、いや、白魔法か！！

あまり相手にダメージを与える事が出来なかった。

圭一「盗むも強力だから禁止にしているんだよ！！！『ぶんどる』」

俺は東城つかさに斬りつける

クラウド「怒ったぞ、圭一『ブレイバー』」

第8話　圭一のリミット技！！！（前書き）

作者の人気が上がるように
読者が増えるように、ひぐらし好きな人が沢山見るように更新しました。
学校の友達もひぐらし好きな人が結構いるので紹介もするつもりでいます。

第8話　圭一のリミット技！！！

俺は東城つかさのブレイバーをもろに喰らってしまった。
そのダメージはかなり高く、ＨＰの１割も満たない数値に下がってしまった。

相手の攻撃は本気で強い！！！

圭一「ＨＰ２０％アップのアビリティがなければ負けていた……」

俺は貴重なエリクサーを１つ飲み干した。
その効果により、ＨＰを全回復させることが出来た。

クラウド「エリクサーを使うのかＭＰはそれ程使ってないのに」

圭一「ハイポーションじゃ回復間に合わないよ。さすがに…」

クラウド「エクスポーションを使えばいいじゃん。ＨＰ全回復の効果の」

圭一「そんなアイテムがあるなんて知らなかったぜ」

そう、エクスポーションと言うアイテムは知らなかった。
ハイポーション、エーテル、エリクサーぐらいしか俺は知らないのである。
乙女のキッスとかうちでのこづちは知っているが……

クラウド「やっぱ、興味がないね。『サンダー』」

相手は電撃攻撃を放ってきた。

圭一「俺は時空魔法を操る！！！『ヘイスト』」

俺はヘイストを使用し、高いスピードで相手のサンダーからかわした。

クラウド「じゃあ、オレのリミット技をもう一つ見せてやる！！！『メテオレイン』」

東城つかさは剣を振りかざし、大量の隕石を降らせてきた

この攻撃を回避するのは不可能。じゃあ禁断強力攻撃・乱れ撃ちで隕石を打ち落とすしかない！！！

圭一「俺には魔法、耐久度アップなど色々な技を持っているんだ！！！『乱れ撃ち』」

俺はカリバット（省略）で相手の隕石に連続で攻撃

隕石を打ち下ろした。

クラウド「一撃必殺のこのリミット技でトドメだ『画龍点晴』」

相手の衝撃波で俺はかなりのダメージを受けた

クラウド「ふっ、即死技を耐えられるとはな…クッククク」

圭一「皮の帽子で隠していたがリボンの力があったから」

クラウド「リボン？即死と吹き飛ばしとスロウとストップ以外の全てのステータス異常を防ぐことができるアイテムのはずだ。即死技

なのにどうして死なない！！！」

リボンでは即死も防げるのに、何嘘言っているんだ。東城つかさは結構バカなんじゃ

俺もそろそろ我慢の限界。

圭一「俺の固有結界を見せてやるぜ！！！！『リミット技・固有結界』」

クラウド「リミット技か。口先からのでまかせだな『超究武神覇斬』」

相手は剣で攻撃を放ってきた

俺の固有結界により、相手の攻撃は消滅

その攻撃法を俺が放つ事ができるカウンター系リミット技。

俺は相手に１５回斬りつけ、そのいずれもかをクリティカルヒットさせた。

クラウド「無念…」

俺は相手の東城つかさを倒したのだ。勝った。やったぞ！！！！！

クラウド「カナーンへ行こうぜ」

圭一「東城、わかった」

俺らはカナーンと呼ばれる場所へ向かう…

番外編　魅音とレナの髪…（前書き）

番外編を作りました。
本編は第１２話を作り中ですが、あまりにも急展開なのですぐには出来ないかもしれません。
番外編が続く可能性もありますがご協力お願いします

番外編　魅音とレナの髪…

クラウド「今日は休憩だっ」

クラウドは悟った。休憩の時だと……

圭一達も賛成したようだ。

圭一「つかさは休憩中何するつもりだ」

圭一はクラウドへ話しかけた。

クラウド「なんだろね。オレの事は教えない！！」

それはおいといて。魅音の心境。

魅音「おじさんはレナの髪型にしてみようかな？」

レナ「どうしてかな？かな？」

魅音「圭ちゃんはレナの事が好き。おじさんは圭ちゃんの事が大好き。圭ちゃんはレナがすきなのはその髪型の所為だろうなと思ったから…」

レナ「はぅ～。そうか。魅音はそれでいいんだね」

沙都子「魅音さん。私は反対です。魅音さんは今まで髪を伸ばしてきたはずじゃないですか。それなのに急にレナの髪型にしたいなんて。魅音さんのイメージが崩れますわ…」

魅音「そうかな……圭ちゃんに好かれたい！レナよりも好かれたい。圭ちゃんへの思いは誰よりも高いから！！」

沙都子「でも、レナの髪と同じにする事はないと思いますわ」

圭一「魅音、聞いてたけど、今の髪の方が俺は似合うと思うぜ。魅音の個性であり、魅音の髪型だからさ～」

魅音「圭ちゃん！！ありがとう。このままにするね。」

圭一「それがいい。髪は女の命だし、魅音も俺は好き」

レナ「圭一君。かぁいい！！魅ぃちゃん。かぁいい！お持ち帰りぃー！！！！！」

その後、俺らはお持ち帰りされたのはいうまでもない。

＊　＊　＊

クラウド「ぼそ…はぅ～オレ、レナのツインテールみたいよ。ぼそ…」

レナ「つかささん。そんなにレナのツインテールみたいのかな？かな？」

クラウドはどうしてもレナのツインテールを見たかった。

絶対、かぁいいと思ったようだ。

レナ「レナがやってもあまり似合わないと思うけどツインテールに挑戦してみようかな…かな？」

数分後

クラウド「はぅ〜。とってもかぁいい！！！お持ち帰りぃー！！！！！」

レナ「本当にレナの事、可愛いと思っているの。つかささん」

クラウド「うん、かぁいい」

クラウドはレナに抱きついた。レナはセクハラされているように思えてきた。

レナの短い髪の毛が少しずつ落ちてきた…

レナ「やっぱり。落ちてきた。私には合わないよぉ〜。魅ぃちゃんや沙都子ちゃんの方が似合うはずだろ…だろ？」

クラウド「いや、レナさんも似合う。とってもかぁいい」

そこに圭一、沙都子、魅音が現れた。

魅音「クラウド、女子を捕まえてセクハラ行動してる！！！おじさん許さない」

沙都子「そんな事は犯罪に近いですわ！！私も許しませんわ」

圭一「つかささん。どが過ぎる。レナのツインテールはかぁいいけど」

俺に殺気が感じた。

俺にセクハラ疑惑とかされなきゃいいんだけど…

レナ「つかささんと圭一君がセクハラしてくるんだけどな…」

俺も女子たちの攻撃の巻き添えを食らうことになった…

第9話　入れ替わった者共（前書き）

今回の話は入れ替わりネタ。
その後のストーリーが大きくかかわる事になります。

第9話　入れ替わった者共

羽入「フフフ、僕はこんな事もできるんですよ…」

羽入は何かを念じた。その力は増幅し、寝ている圭一達を襲い掛かる！！！！！

それが圭一たちへ辛い旅をさらに辛くするものとは思っても見なかった。

◆

圭一「ちょっとおかしいな…」

俺は、今日普通に目覚めた。だが、おかしい現象が起きた

世界が高く見える、いつもと感覚が違う……

何故だ、何故なんだ。

レナとか沙都子とかに聞いたら何かわかるかもしれない。

――ダッダッダッ…

俺は階段で下に来た。そして朝でレナ、魅音、東城に会った

圭一「レナ、魅音、東城、おっす！！！」

レナ「どうしたの、”沙都子ちゃん”」

魅音「”沙都子”、おはよう」

クラウド「”北条さん”、おはようございます」

沙都子！？俺は前原圭一、どうして沙都子と呼ばれるのか、理由がわからん、何故、俺を圭一くんとか言ってくれない！

圭一「俺は圭一だぞ、何故沙都子とか言うのか！！！」

レナ「だって沙都子ちゃんだもん」

魅音「鏡を見せるからさ、さっ」

魅音は俺に鏡を見せた。

その鏡を俺が見たら、驚いた…

どうみても沙都子しか写らない、何故だ

ありえない。俺が沙都子になるなんて

そこに俺が現れた。

沙都子「おはよぉーですわ」

俺が来た。何故、俺が現れたのか、不明だ

圭一「どうして俺が居るんだ！！！！」

レナ「圭一君だよ、沙都子ちゃん」

魅音「圭ちゃん、おはよう」

俺に話したのか、魅音、いや、俺には沙都子といい、俺の体には圭

ちゃんと

沙都子「あああああああああああああああああ、私(わたくし)、私がいるですわ」

沙都子は驚いた。
この状況から見て俺と沙都子が入れ替わったとしか思えない、
念のため、俺はほっぺたをつねった。

圭一「い、痛いぃいいいいいいいい」

それは夢ではなかった。現実に起きた事だった。
自分でほっぺたをつねった事はレナたちにはあははと笑われた…

1時間後、俺は散歩していた。

圭一「!?」

ジン「一人の少女が歩いているとは運がいい。お前はわしに殺される」

少女、それは沙都子の体だからか、
それはさておき、アイツはアラジンのランプから出た魔人のような奴だった…

圭一「くそぉ、俺はお前を倒すしかないな」

俺は武器をもってなかったので素手で殴った。
しかし、相手には全くダメージを与えられない。

ジン「燃えろ！！！『ファイア』」

相手は炎で攻撃を放つ、この程度の攻撃はかわせるはずだ、
俺はかわそうとしたが、体がなれてなく、かわす事が出来なかった。

圭一「くっ、攻撃を受けてしまった。痛い…」

俺はこれだけのダメージを食らう、さすがに少々辛いな…

圭一「禁止技を放つか、黒魔法ですわ『ブリザド』」

あれ？何故、ですわ。
それはさておき、俺は氷で相手にダメージを与えた。

其処に一人の少女が現れた…

第9話　入れ替わった者共（後書き）

この話を果たして投稿してよかったのであろうか。
この物語はこれで急展開を迎えたと思われます。
圭一と沙都子が元の姿に戻れるまでそのマンマのストーリーとなりますね。

第１０話　性格は肉体によって変わってゆく…

その少女の容姿を説明しよう…
容姿は藍色の長い髪を高い位置で２箇所に結わえており、紫の瞳、そして白いシャツ、濃い青のプリーツスカート、リボン（ピンクの蝶ネクタイ）、サスペンダーをつけているようだ…

梨花「にぱー☆、～ですわと言いましたね。」

どうみても、梨花ちゃんだ。服装から見て間違えない。髪型は違うけど…

圭一「梨花ちゃん、何のことだ」

人目で梨花ちゃんだと思った。だから梨花ちゃんと呼んだ

梨花「ボクは梨花じゃないのです。別の人なのです。圭一、貴方へ忠告を与えに来ただけです」

何故、俺が圭一だとわかった。どうみても沙都子だろうが…
でも、俺の事を圭一だと分かってくれる事はありがたい。
そこにジンとか言う魔物は俺らへ襲い掛かる！！！

梨花「圭一と話すのを邪魔しないで欲しいのです！！！！『ブリザガ』」

梨花ちゃんは大量の氷の氷柱を相手の頭上へ落とし、攻撃をした。

ジンは氷の氷柱により、氷結し、そして氷ごと粉々になって死んだ

圭一「何を話しに来たの」

梨花「みぃ☆。圭一っ、１００歳の人が小学生の体に入り込むと性格も小学生っぽくなるんです。それと同じく、圭一も沙都子の性格に近づいているのです。元の体にできるだけ早く戻るのです」

何だって、俺がだんだん、沙都子に近づくのか！！！！

沙都子の体で色々な事をするのは面白そうだけど…

梨花「みぃ☆、ボクはどこかへ行くのです。圭一は頑張るのですよ♪」

梨花ちゃん強力な呪文を唱え、どこかにワープした…

俺はみんなの所帰ってきた

沙都子「お帰りなさいですわ」

魅音「沙都子、おかえり」

レナ「沙都子ちゃん、おかえりぃ」

クラウド「おかえり」

俺は当分沙都子の姿で冒険を続けなきゃいけない

次の日、俺は見知らぬ少年に出会うことになる…

第１１話　銀髪生意気少年、北大路ゆい登場

ルーネス「オレは北大路ゆい。よろしくな！！！」

俺らがところともなく歩いていたらたまたま会った少年、北大路ゆい。

こいつに出会うまでの経歴を言おう

それは俺が梨花ちゃんっぽい人に出会ったあとの事だった

圭一「つかささん、何処いくか決めよう」

クラウド「じゃあ、ウルの村に行くのがよいだろう」

こいつは東城つかさ。金髪で蒼い目を持つソルジャー。

巨大なバスターソードを持っている。

圭一「よっしゃー、いくぜ」

俺は仲間達とウルの村に行く。

その険しい道、自分の幼い体などで厄介になった道。

レナ「沙都子ちゃん、大丈夫」

レナは俺に言ったようだ…

圭一「大丈夫だ」

俺は今、沙都子と言う女の子の体に入っている。何かの原因によっ

て沙都子と体が入れ替わってしまったんだ。

沙都子「おーほほほ、どうしたんですか。圭一さん」

俺の体の沙都子は俺に向かって言った。疲れていないか心配してくれたようだ。

良い仲間達、信頼できる仲間達。

そしてウルの村についたんだ。

其処に居たのは一人の少年、北大路ゆい。

大切な3人の仲間をケフカと呼ばれる者に殺されてしまった少年。

ルーネス「そう、無残だった。オレも大怪我を負い、本名がばれたらまた殺される。偽名と偽の姿で暮らすしかない。だけど、オレはお前らに会った。お前らの力を借りて絶対、ケフカとかを倒す。光の戦士として！！！」

圭一「いい。俺らと一緒に来い…」

ルーネス「君、かわいいなぁ。俺の好み。」

俺に言っているのか。北大路ゆい。沙都子の体とは言え、俺は男だぞ

そうしていた。

＊　＊　＊

悟史「ウルの村付近で食料を調達しよう」

僕の名は北条悟史。詩音と共に冒険をしている。

僕はこの世界の異変を探し、その異変を消し去るのが目的。

詩音「宿で一休みしよう」

僕と詩音は宿で一休みした

第１２話　鷹野、そしてケフカの目的

鷹野「ケフカ、人を雇うの？」

鷹野三四は黒い帽子に軍師の服。その容姿は銀河鉄道７７７のメーテルに似ていた。

その三四はケフカに話す

ケフカ「そうだ。ゲマと呼ばれる者を雇って、その力で必ずや、圭一達を全滅させてみます。」

鷹野「この作戦。成功するの？」

ケフカ「ゲマの働き次第です。そんなには信用してませんが、かなりの実力者のはずです。その性格、悪役としても優秀だと思いますし」

鷹野「ケフカ……期待しているわよ」

皇帝「ケフカさんを期待していんですか。ＦＦシリーズでも弱いボスとして有名ですよ」

こいつは皇帝。強力なメテオを使用できるパラメキア帝国の皇帝。かなりの体力を誇り、どんな人でも倒すのは困難。

セフィロス「ナイツオブラウンドでも受けたらケフカは一撃死だな。弱いラスボスだしな」

鷹野「ナイツオブラウンドはＦＦ７でしょ。セフィロスさんが喰ら

う技よ」

セフィロス「くっ」

セフィロスは自分が受ける技なのを良く知っており、わざと言ったけど、やっぱり言われて唖然とする…

ケフカ「ゲマさん。例の作戦。成功させてください！！！」

ゲマ「わかりました…」

＊　＊　＊

ゲマ「夜ですね……」

ジャミ「ゲマ様、何をする…」

ゴンズ「なんでも力仕事、スル！」

ゲマは手下達に言う

ゲマ「お前らの任務はいくらかの人にこの薬を飲ませるんだ！そしてさらえ！！」

ジャミ「御意」

ゴンズ「了解しやした」

ジャミやゴンズはこの薬を圭一、沙都子、そして詩音に飲ませる事を成功した

この薬はみなさんのわかるとおり、Ｈ１７３と呼ばれる物だったのだ！！！

次の日……

レナ「圭一君、沙都子ちゃんがいない。何故？何故？」

魅音「どこかに行ったのだと思う…」

レナ、魅音、クラウド、ルーネスは探す事にした。

クラウド「ゆい！、どうだ」

ルーネス「見つからないぜ。つかさ、お前はどうだ！！」

クラウド「俺も見つけられない！！！」

其処に一人の女の子が立っていた

梨花「大変なのです！」

第１３話　さらわれた者達

梨花「みぃ……大変なのです！」

レナ「梨花ちゃん。かぁいい、久し振りぃー！！」

レナは梨花をお持ち帰りしようとする

梨花「私はお持ち帰りなんてされないのです！」

レナ「はぅ～もっとお持ち帰りなのです」

梨花「にぱー☆、鉈女の癖に生意気なのです。ミニマムなのです」

梨花はレナにミニマムをかけた。

小さくなった。

梨花「さて、私の話を聞いてもらいますのです」

ルーネス「なんだろう～」

梨花「圭一と沙都子と詩ぃを助けてほしいのです！」

魅音＆レナ「なんだって、みんな、誰に捕まったの？？？」

クラウド「みんなに何があったんだ！」

梨花「恐らく、誰かにＨ１７３を盗まれてしまったのだと思うのです」

Ｈ１７３とは感染者を一気にＬ５状態にしてしまう恐ろしい薬
それを盗まれ、更に圭一、沙都子、詩音が居なくなったと言う事は

魅音「大変じゃん。おじさん、それわかるよ。３人とも雛見沢症候群になってしまうじゃん」

梨花「そう…だから助けてほしいのです」

レナ「圭一くんたちはどこにいるのかな？かな？」

梨花「ボクもバカじゃん。分からないのです。でも裏山辺りに何か行ったような気がするのです。」

みんなは裏山へ向かう。３人を助ける為に…

悟史「まってよぉ～」

エクスカリパーを持つ悟史は追いかけていった。
悟史はギルガメッシュの力を手に入れたらしいが……悪い部分も少し引き継いでしまったようだ…

第13話　さらわれた者達（後書き）

2週間～1ヵ月後、次話を投稿する予定です。

第１４話　裏山、圭一戦（前書き）

久し振りの更新です。
スランプやかんけんで全然これませんでした。
とりあいず、まだまだ在庫はあるから次話をご用意しました。

第１４話　裏山、圭一戦

裏山へついた。
そこは魔物の宝庫だった

触手を持ち、充血した眼の魔物、蓑虫の魔物など沢山いた

レナ「魔物、殺してやる！殺してやるッ！！！」

梨花「レナさん。なでなでなのです。落ち着くのです。ボクをお持ち帰りするのです」

レナ「梨花ちゃんお持ち帰りぃー」

レナは落ち着いた……

魅音「本当にここで大丈夫かな」

ウッディ…　　ウッディ…

ルーネス「ウッディと音がするな」

梨花「ル、いやゆいさん。どうしたのです」

ルーネス「か、かすかにウッディと言う音がするんだ…」

ルーネスは梨花、魅音、レナ、クラウドに言う

クラウド「気のせいじゃないか！」

レナ「ねぎかぁいい。振り回そう…」

レナはまだ、ねぎを持っていた。
レナはねぎが好きでよく振り回している。あと、鉈を振り回す時もあるらしい
このねぎ番外編でも登場する物だ

魅音「ウッディってトイ・ストーリーのキャラじゃないのか」

そう言う事でもっと、奥地へ進むと小さい影があった。

圭一「ウッディ！！！！！！！！！」

それは沙都子の姿をした圭一（けいいち）だった

圭一「お前ら、帰れですわ！！！」

レナ「圭一、ごめんね。こんな状態にして」

梨花「レナは悪くないのです。悪いのはＬＶ５に引き上げる薬を盗んだ泥棒なのです」

レナではなくて、ＬＶ５に引き上げる薬が原因、
それを盗んで、圭一に使った奴が悪いものだ

圭一「嘘だッ！！！！！」

レナ「ゴメン、ごめんなさい、許して！」

圭一「嫌だッ！！！！！」

沙都子の姿の圭一はバットを持ち、レナに襲い掛かる

レナ「この程度ならば、安心でしょ、でしょ！！」

レナはムーンアクスで勝負をかける。だが、攻撃は相手のほうが強い

レナは飛ばされる

梨花「ボクの萌え萌えエンジェルモートの制服なのです！！！」

圭一「う、萌えーーー」

圭一は今、萌えている。チャンスだ

ルーネス「神よ、裁け！！！サンダラ！！！」

クラウド「お前は許さない。斬る！クライムハサード！！」

ルーネスは神の裁き、強力な雷。

クラウドは助走し、下から上に一気に切りつける攻撃。

二人の攻撃は圭一に直撃、

その威力は高く、かなりのダメージのようだ。

圭一「フフフ、ウッデウッディーーーーー」

――殺気が感じた。

すると・・・・・・・

圭一はＬ５末期状態になってしまった…

第１５話　ＬＶ５発祥。前原圭一の恐怖…

相手は雛見沢症候群ＬＶ５末期。
攻撃のパワー、回避力、速度などがとてもあがり、攻撃的になったようだ……

圭一の金髪の髪は揺れた…

圭一「ウッディ（シヴァ召喚）！！！」

圭一はウッディと放ち、召喚獣・シヴァを召喚する。
シヴァはやや薄い青の髪をポニーテールにしている。
その長さは１５ｃｍ以上だろう…
全体的に身体の色は黒っぽい青。もしかしたら少し水色に近いかもしれないが…

シヴァは指先から冷気の光線を放った。
それは地面を完全に凍らすほどではないが、つるつるすべる床にはなった。

ルーネス「炎よ、焼き尽くせ！！　ファイラ！」

ルーネスは炎の魔法・ファイラを唱えた。
それは炎の渦で敵を攻撃する魔法。
ファイア系の技でファイアよりもかなり強力な必殺技。

ファイラがシヴァへ襲う。
シヴァは氷属性の召喚獣。炎に弱いのだ。
その為、シヴァにはかなりのダメージだった。

クラウド「じゃあ、オレも炎で攻撃をするぜ　火炎放射！」
クラウドはてきのわざのマテリアに習得させていた技・火炎放射を発射。
その炎はシヴァへ飲み込んだ。
圭一「シヴァ！　ダイヤモンドダストを見せてやれ！！！」
レナ「いや…　沙都子ちゃん。シヴァは私が倒すよ」
レナは圭一君の事と沙都子ちゃんと言った。
それは圭一が沙都子の体だからだ。
レナはダイヤモンドダストを放とうとしていたシヴァにムーンアクスでラッシュ攻撃を放つ
連続で何回も切りつけたのである。
シヴァは大きい喚き声を響かせ、倒れた。どこかに消滅した。
圭一「レナ……　倒れてもらう！！！」
圭一はバットで思いっきりレナへ殴る
レナはその攻撃に対してムーンアクスで守った。
――カキィン！
圭一とレナのぶつかり合い。
圭一「・・・【紅蓮の炎よ、全てを骨まで焼き尽くし……この地を

飲み込めん】ファイガ！！！」

圭一はレナに向かってファイガを唱えた。
ファイガはファイア系最強の魔法。その威力は地底のマグマのような火炎で相手を包み込み、燃やし続ける。
そして地面もろとも飲み込んでゆく強力な魔法

レナ「ファイガ…確かにファイア系では特に強い魔法だけど、私はもっと凄い魔法を持っているんだよ、だよ。レオボルケーノ！！！」

レナは地獄の業火を呼び出した。
その威力はファイガよりも……イフリートの地獄の火炎よりも強力な火炎。
ファイガとぶつかり合い、両方とも消滅した……

圭一「ば、馬鹿な！　俺のこの力でのファイガに打ち勝つとは…」

レナ「いや、沙都子ちゃんは凄いよ。本当に！　本来レオボルケーノはファイガよりも高い威力の魔法。それなのにその威力が同じだったなんて！」

第16話　圭一VSレナ！！！

ファイガとレオボルケーノがぶつかり合い、相打ちご、レナは攻撃を仕掛ける

レナ「まだまだだよ…だよ！！！」

レナは圭一へ向かってムーンアクスで攻撃を放つ

圭一「レナ……　俺には勝てないぜ！！」

圭一は小さな幼女の体を巧みに使い、相手の攻撃を避ける。
そしてレナの足に向けてブリザドを唱える
レナはそのブリザドを避けるのだが、圭一は連続でブリザドを放っていたのだ。

レナ「くっ」

レナの足は凍り、動けなくなってしまった。

圭一「ウッディ！！」

圭一はサンダーをレナに向けて放つ！

レナ「雷には風が相性が良いのは知っているよね…よね『エアロラ』」

レナは青魔法・エアロラを放った。
サンダーを打ち消し、圭一に攻撃を放つ。

圭一「ぐっ、ウッディウッディ！！！ウッディ！！！！！！！」

圭一はレナに連続で殴りつけた。
その１発１発は弱いが、数が多く、致命傷になった。

レナ「仕方ないよ、圭一君は強い……　だが、私は負けないよ。あはははははは『超ラッシュ』」

レナはムーンアクスで何回も何回も圭一に斬りつけた。
その攻撃力は高く、圭一は倒れこんだ。

梨花はその隙を見て沙都子の体の圭一に注射した。

圭一「俺、あの時みたいにまた、狂ってごめん、レナ…」

レナ「ううん……いいよ…いいよ」

圭一「アイシールドの石丸じゃないか！！」

レナ「いや、それ昭和５８年までには売ってないよぉ～」

クラウド「圭一が無事で本当に良かった…」

クラウドは圭一に言う

圭一「東城つかさ……ありがとう」

ルーネス「圭一さん、誰に注射されたんですか？」

ルーネスは圭一に質問をした。
圭一はちゃんとルーネスに答える

圭一「北大路ゆい、黒フードの男でしたわよ、顔は見えませんでしたけど」

圭一はうっかり丁寧な女性語をしゃべってしまった。
それはそれ、これはこれ。

クラウド「犯人は誰なのかな？　かな？」

レナ「つかささん、かな？をパクるじゃない！！！」

レナはクラウドにレナパンチを放った。
クラウドは一撃でノックアウト

圭一「俺の体の沙都子はきっと、すぐ先にいるだろう……　よっしゃー、いくぞー！！！」

第17話　トラップ少女沙都子

俺達は洞窟を進んでゆく……
距離は短く、洞窟にすむ魔物には襲われなかった。
俺らは全員結構傷も負い、疲労もたまっていたが、傷は全て梨花ちゃんが直してくれたはず……
そして俺の体の沙都子を見つけた。

梨花「圭一！」

圭一「俺はここ、あそこの人は沙都子だよ、梨花ちゃん」

梨花「間違えたのです……」

沙都子「梨花さん、私に何か、ようがあるのですか？」

沙都子は俺らのギャグを無視し、梨花ちゃんに話しかける。

梨花「沙都子、じっとしてくださいなのです！」

梨花はそっと注射きを持ち、沙都子に当てようとした。

沙都子「その注射器、誰に使おうとしたんですか？私に使おうとしても無駄ですわ！！！」

沙都子は襲ってきた。ちなみに俺の体なので俺の身体能力を持つ。
更にトラップの能力も高い

相手はトラップボックス2体と沙都子。
相手の箱はリリカルおもちゃ箱ではない！
沙都子「おっほほほ、トラップ少女沙都子の本気を見せてあげるわ！！！」
圭一「うりゃー」
俺の拳を受けてみろ！沙都子！！！
沙都子「みえみえな戦法、それじゃ俺は倒せないわ『スロウガ』」
沙都子がどうして俺と言ったか、それは俺の体だからだ。
その宿主の性格にどんどんなってゆくから……
相手のスロウガで全員の速度ダウン。
レナ「必殺！！！『兜割』」
レナは空中で1回転後、思いっきり沙都子へムーンアクスで攻撃を放つ。
攻撃後、相手の防御力を下げる事に成功した。
梨花「み…みんなをサポートなのです☆『ヘイスガ』」
梨花は味方全員にヘイストの効果があるヘイスガが唱えたのだ。
ルーネス「箱が厄介そうだから先に倒す！『ふみこむ』」
ルーネスは箱に攻撃を放った。

箱はルーネスの一撃で壊れた。

沙都子「うかつですわね。トラップ発動！！！」

トラップボックスが壊れた事で沙都子のトラップが容赦なく襲い掛かった！！！

俺らはかなりの傷を負った。

クラウド「オレが皆を回復してやる。『ケアルガ』」

クラウドは全体化のかいふくマテリアでケアルガを唱え、味方全員のダメージを全回復した。

魅音「おじさんの存在を忘れないでよ『ヴェフェルゴル』」

魅音は怨念を出しながらトラップボックスへ攻撃を放つ。

一撃でトラップボックスは壊れ去った。

沙都子「トラップボックスのトラップ発動！！！」

俺達に大量のトラップが襲い掛かった……

第１８話　ヘルズ・トラップ

沙都子「……やりますわね！！『タライトラップ』」

沙都子はロープを切る、すると大量のタライが俺達の所に降ってきた。

圭一「あ…痛たたた」

レナ「お持ちかえりぃ出来れば……」

魅音「おじさんの出番が少ないんだけど！！！」

クラウド「これだけのダメージを受けてしまったならこれぐらいのリミットは外してもいいか…『凶斬り』」

クラウドは沙都子に攻撃を放った。

沙都子は結構ダメージを受けたようだ。

更に麻痺した。

梨花「みんなで連続攻撃なのです！！」

みんなで連続で圭一の体の沙都子に連続で攻撃をした。

普通にその隙に注射器を使えばいいという発想はなかった。

沙都子「もう、怒ったからね！！！　みんな死んじゃえ！！！！！」

沙都子はＬ５末期状態になった。

麻痺は治った。

レナ「必殺！！『ウイング斬り』」

レナは斧系必殺技・ウイング斬りを放とうとして沙都子の所へ向かう！！

それはワナだった。

沙都子「電気ショックワナを用意したぜ！！！」

レナ「し…しまった！！！」

レナは痺れて麻痺してしまった。

沙都子「トラップボールを用意しますわ！！！」

2体のトラップボックスが現れ、更に俺に強力な攻撃を負わせてきた。

圭一「ぐっ」

沙都子「トラップボックスまでいる状態でコレを受けてもらいますわ！！！『タライトラップ』」

沙都子はロープを……（以下省略）

俺達に大ダメージを与えてきた。

レナ「あっはははは！！！　私オリジナルの技を受けてもらうよ…よ『あははブレイバー』」

レナはあはははは…と叫びながら助走し、沙都子に強烈な一撃を放った。
沙都子はその攻撃のダメージが高かったのか、手で傷口を押さえていた。

梨花「今なのです。注射！！！」

沙都子「甘いですわ！『毒ガストラップ』」
沙都子は毒ガストラップを仕掛けていた。
その毒ガストラップは殺傷能力も持っていた。

梨花「いや、毒対策ぐらいしてるのです！！！　私は運命に打ち勝つ！　沙都子は私が助ける……」

梨花は人格が変わったように沙都子以上の高いスピードで翻弄し、注射器で沙都子に刺した。

沙都子「わ、私はなんてことを…」

梨花「沙都子が無事でなによりなのです☆」

沙都子「みんな、私と一緒に詩音さんを助けましょう！！！！」

圭一「いや、少し休んだ方がいい…」

梨花「じゃあ、結界石を貼りますのです。消耗品だけどこれはどこでも使えるコテージのようなものなのです☆」

こうして俺達は結界の中で休息を過ごした。

第１９話　詩音の目的

詩音「くけけけけけ、ゲマ様、圭一と沙都子がやられたようです！！！」

ゲマ「そうなの？　じゃあ、詩音がいくしかないわね！！！」

詩音「ゴンズとジャミを貸してもらえないでしょうか？」

ゲマ「詩音、一人では勝てないの？」

詩音「多分勝てないと思います。しかし、ゴンズやジャミもいれば勝利できる可能性が飛躍的上がる！！！」

ゲマ「ケフカが許可をくれれば考えてもいいわよ！！！」

詩音「そ、そうですか……　頑張って許可を貰って、ゲマ様」

ゲマ「いや、圭一らは絶対ケフカ様にも脅威だわ。処分されるのを覚悟で、ジャミやゴンズを貸してあげるわよ」

詩音はゲマからラムポーンソックリのジャミとグレンデルそっくりのゴンズを借りる事に成功

詩音「くけけけけけけけけけけけけけけけけ」

＊　＊　＊

沙都子「梨花さん……」

梨花「気付いたみたいね…」

レナ「圭一君、おはよう」

圭一「いや、こいつは沙都子だ。圭一は俺！！！」

確かに俺と沙都子は体入れ替わったから俺がそういっても説得力はない。

だが、言わずには入れなかった。

クラウド「さあ、行こうぜ！！！」

ルーネス「そ、そうしよう」

梨花「いや、まだ沙都子が回復しきっていないと思うわ。私は其処で残る。沙都子を看護するわ」

黒梨花はそう言う

圭一「じゃあ、行くぜぇー！！！」

俺らは洞窟を進む、洞窟の奥に行き、詩音も助ける。

詩音「くけけ、飛んで火に入る夏の虫」

果たして、圭一達は詩音を助けられるのか、次回に続く

第２０話　激突！！！詩音戦

詩音「サトシくーん、何処？、何処なの！？」

レナ「圭一君との戦闘の前まで居たのに、洞窟の入り口で待っているのかな？かな？」

悟史君は圭一戦以降、ずっと忘れていたのでした。
ここでレナ、魅音は思い出した。

魅音「詩音！　きっと私が助けるからね！！！」

詩音「姉さんはここで眠ってください！」

詩音はスタンガンを魅音に向かって撃つ。
魅音は痺れ、そして眠ってしまった。

詩音「詩音特製睡眠銃入りスタンガン。１発しか睡眠は出来ないが、その効果は大きい」

レナ「悟史君が来るまで足止めするしかないねぇ～」

詩音「ジャミ、ゴンズ、君達も戦え」

ジャミ「わかりました！」

ゴンズ「合点承知！！！」

敵の所にジャミと言う鼻息が凄い牛のような奴とゴンズと言うブル

ドッグの戦士が現れた。
相手は3体。結構強敵そうだ。

ゴンズはレナが戦い、つかさとゆいがジャミと戦う事になった。

レナ「ブルドッグかぁいい、お持ちかえりぃ！！！」

ゴンズ「やだっ！！！」

ゴンズは武器でレナへ攻撃を放つ

レナ「くっ、この糞犬ッ！！！　ジャンプ斬り！！！」

レナはゴンズをお持ち帰りできない事と強烈な攻撃を受けた事。
堪忍袋の緒が切れた。レナは飛びあがり、ゴンズにムーンアクスで斬りかかる。

ゴンズ「オレの体は鉄のように固い…」

ゴンズにはそれ程効いていなかった。

＊　＊　＊

俺と倒れた魅音は詩音と戦っていた。
レナや、ゆい、東城つかさは他の相手と戦闘中。

状況から言って凄くやばい状況。
俺は今、沙都子の体。俺は死ぬわけにはいかない。
そして魅音は眠ってしまった。
まずは、魅音を目覚めさせなければいけない！！！

考えていたら閃いた…

第２１話　ジャミ&ゴンズとの死闘

レナ「あはは、こ…この程度」

ゴンズは本気でレナへ何回も通常攻撃を放つのだが、レナは軽く遊んでいた。

ゴンズ「うりゃっ！！！」

ゴンズは強力な一撃を放ち、レナをすっぽと真っ二つにした。

レナ「リレイズ……一度倒されても復活できる魔法。私を倒したとは思わないでよ、よ！」

レナは余裕のまなざしをさしていた。

ゴンズには必殺技も魔法もなく、通常攻撃をするだけの敵のようだ……

攻撃力や体力はとても高い、睡眠と毒は効かないのだけど、スタン効果はよく効くみたい。

レナ「ゴンズの弱点はスタンかな？かな？と言う事で…　いあい斬り！！！」

いあい斬りは相手に攻撃後、スタンの追加効果を持つ攻撃。

ゴンズはボスで即死、睡眠、毒、その他の状態異常は効かないがスタンだけは効くのでスタンで攻める事にした。

それは成功し、相手は何も出来ずに倒れこんだ。

レナ「はぅ…ゴンズちゃんはお持ち帰りぃ！！！！！！」

＊　＊　＊

レナがゴンズと戦っている時、クラウド、ルーネスはジャミ戦をしていた。

ジャミ「凍りつく息！！！」

ジャミは口から凍りつく息を吐き出した。

クラウド「くっ……」

ルーネス「相手はブレス攻撃みたいだな！！！」

クラウド「ゆい、行くぞ！！！」

ルーネス「わかった。東城！！！」

ジャミ「なにやらと…」

クラウドとルーネスは作戦を立てていた。

二人で協力して相手を倒す。

ルーネス「凍りつけ！！！　ブリザガ！！！」

ルーネスは強力な氷の柱でジャミの体を冷やす。

ダメージも大きかった。

クラウド「冷えた体には炎で攻撃！　ファイガ！！！」

クラウドはほのおのマテリアの力を借りて、ファイガを放つ。
ジャミにはとっても効果的だった。
ジャミは熱ちぃと興奮し速度の高い突進を放ってきた。
オレ達は避けるのだがそこに大きい火の玉を放ってきた！

ルーネス「ブリザラ！！」

ゆいはブリザラを唱える。その氷の威力は相手の火の玉以上。
防御に使ったのは都合が良い！！！

クラウド「凶斬り！！！」

オレは相手に凶の字で斬りつける。
恐らく、相手には麻痺の効果までは与えられないと思う…
でも、その威力は大きい！

ジャミ「くっ…　バギクロス！！！」

ジャミは巨大な竜巻を呼び出した。
見た目からしてこれを受けたらただではすまないだろう……
リフレクで跳ね返せる種類とも限らないし…

クラウド「サンダガで打ち消すしかないな…」

オレのマテリアの中でも最初から今までお世話になった十八番のサンダーのマテリアの力を借りてサンダガを唱える事にした。
オレの攻撃と敵の攻撃は予想どおり、オレの方が一枚上手。
オレの雷が相手を包み込んだ。

ジャミ「ぎゃあああああっ！！！！」

ルーネス「チェックメイトだ！　合体召喚・リバイア！！！！」

リヴァイアサンが出現した。

そのリヴァイアサンは大海衝を放ち、ジャミへのトドメを刺した。

ジャミは力尽き、倒れこんだ……

第２２話　詩音の勝利！？

俺は閃いた。それはポケットを見ることであった。
ポケットに手探りしていると柔らかい物を見つけた。

圭一「ぱ、パンだっ！！！」

俺はそのパンを取り出した。
そのパンは眠気覚まし入りのパンのようだ。

圭一「魅音、パンを食べろ！！！」

俺は眠っていた魅音に眠気覚まし入りのパンを食べさせた。
すると、魅音は目覚めた。

魅音「い、痛っ！」

魅音はスタンガンのダメージが残っていた。

詩音「うぉおおおお！！！！　猛ラッシュ！！！」

詩音はサバイバルナイフで猛ラッシュ攻撃を放ってきた。
猛ラッシュはいわば、超連続攻撃。
相手に３回も斬りつける。大抵はそれを喰らえば瀕死と言うわけだ。

魅音はかなりの傷を負う

圭一「ハイポーション投げ！！！」

俺は魅音にハイポーションを投げ、傷を癒した。

魅音「ありがと、沙都子♪」

圭一「私、圭一でしての」

口調間違えた。沙都子の人格に近づきつつあるようだ……
かなり近づいた。もし、元に戻っても当分は沙都子っぽい言葉を話すようになりそうかもしれない。

魅音「死者の力よ、相手を切り裂き、闇に堕ち！！！　エクトプラズマ！！！」

魅音は念じると、詩音に邪悪な傷が出現。
それは死者の呪いが切り裂いた痕である。

魅音「詩音、きっと助ける！！！」

魅音はチキンナイフとマインゴーシュの二刀流をしており、高い攻撃力と回避能力と言うかなり良い装備の仕方のようだ……

魅音は詩音に攻撃を放つ

詩音「くっ、まだまだ！！！！！！」

詩音は少しＬ５に近づく！！！

Ｌ５に近づいた詩音。
俺と魅音の二人とはいえ、相手はかなりの強敵だ

レナ「魅ぃちゃん、助けに来たよ！　ダッシュ斬り！！！」

レナが駆けつけてくれた。
ダッシュしながら鉈で詩音へ攻撃を放った。

詩音「レナかぁ…　でも、負けませんよ！　エクトプラズマー！！！」

邪悪な魂は刃となり、レナへと襲い掛かる。

レナ「これぐらい、痛くもかゆくもないね！」

圭一「幼女パンチ！」

俺は詩音へとパンチを放った。
小さな拳で攻撃をした。

詩音「沙都子のパンチぐらい、効かないよ！」

魅音「詩音、目を覚まして！」

詩音「お姉、みんなの声が聞こえる。でも、お前達を倒さないと皆は、サトシくんは戻ってこないんだ！！！　【邪悪な闇、混沌の闇、人々の憎しみ、それらは集まって邪悪な物を生み出す。混沌の力を私の所に集まり、放出をしろ！】禁断魔法・カオスアレイン！！！」

詩音は禁断の大魔法を使った。
その効果は凄まじく、その場の詩音以外を一気に全滅させるほどの威力だった。

詩音「くけけけけけけ……　勝った、勝った、サトシ君、私は勝ったんだよ！！！」

詩音は一人で笑っていた。
そして・・・・・

詩音「誰も、倒れてしまった。私が、私がやったんだ！！！」

詩音は全員を倒してしまい、後悔もした。
疑心暗鬼で全員倒してしまったんだ。
全員死んだと思い込んでいた。

詩音「私はみんなを死なせてしまった。そんな私がサトシ君の為になったのか！！！　なったんだよ！！！　私はみんなを死なせた罪を償って死んだらサトシ君の為にはならない。生きていこう……」

そこに1人の少女と2人の少年とが来た。

一人は青い髪の少女。一人は茶髪の少年。

もう一人の少年は・・・・・・

第２３話　北条悟史・・・

一人は青い髪の少女。その名は古手梨花。

一人の茶髪の髪の少年。それは実は女の子であり、北条沙都子。

もう一人は・・・・・

金髪の少年。その名は北条悟史……

梨花「アララ……　みんな詩音にやられてしまったわね。治療する人のみにもなってみなさいよ……」

梨花はそう言い、回復魔法（ケアルガ）を圭一、レナ、魅音に使う……

沙都子「みんな、どうしたのですか！」

圭一の姿の沙都子も心配をしていた。

みんな、カオスアレインでやられてしまったからだ……

悟史「詩音！！！！　何処だ！！！」

悟史は詩音を呼んだ。

天上に詩音は立っていた。

詩音「さ…悟史君なの？　くけけけけけけ、私は……悟史君の為にみんなを殺したんだよ！！！」

悟史「いや、この人達は死んでいない……　かろうじで生きていた……　詩音、お前ってやつは！！！」

悟史は詩音を殴ろうとした……

詩音「私は、悟史君のためにずぅ～と頑張ったんだよ、何で殴るの……」

悟史「み…みんなを傷つけたからだっ！！！」

詩音は頭を抱えてしまった。

悟史のためだけにずっと頑張ったのに、悟史に認めてもらえなかったから。

詩音「も…もう一度カオスアレイン……」

悟史「だ、駄目だ！！」

悟史はＣ１２０を詩音へ注射した。

詩音は気を失った。

悟史「詩音の事、僕はそんなに考えていなかった。ごめんなさい！」

悟史も泣きながら謝った。

詩音の事を思っていた量が足りなかったから、謝り続けた。

梨花「回復魔法（ケアルガ）のかいがあって皆、元気になったのです！」

みんな、みんなダメージも癒え、元気になった。

精神力はまだ、回復できておらず、エーテルだけではなく、休憩も

必要となった。
みんなは休憩をした。
圭一＆沙都子＆詩音「多分、敵はゲマだ！！！」
俺、沙都子、詩音の言葉はハモった。
俺たちはみんな、ゲマによって疑心暗鬼状態にされていたのだ。

第２４話　羽入、現る！！！

ゲマ「オッホホホ、同士討ちしている頃ね…」

そこにはゲマと呼ばれるネクロマンサー風の男がいた。
こいつはケフカに雇われた凄腕の能力者である。

今、圭一達は同士討ちを丁度終えた所だった。
しかし、ゲマはそのことをまだ、知らない……

羽入「あぅあぅ、貴方は悪の元凶。僕が倒すのです！」

ゲマのいるところに一人の少女が現れた。
薄い青紫のロングヘアーに巫女さんの服、そして角が生えている少女だった。

そして、ゲマと羽入の戦いが始まった。

ゲマ「私の攻撃を受けてもらおう！！！」

ゲマは口から燃え盛る火炎を吐き出した。
羽入の巫女服には強力な魔力があり、その炎を乱反射してしまった。

羽入「あぅ、この程度の火力なんて、僕には意味無いのですよ☆」

ゲマ「ならば！！！　メラゾーマ！！！」

ゲマは指先から巨大な炎の玉を放った。
羽入は手から魔方陣を作り出し、跳ね返そうとした。

しかし、跳ね返せなかった。

羽入「油断したのです。魔法を跳ね返すリフレクがどうして、効かないのですか？」

ゲマ「…簡単な事よ、私のメラゾーマは魔法ではなくて呪文と呼ばれる物。魔法と呪文は違うのよ！念のため、マホカンタを唱えておくわね」

マホカンタ。
それは羽入も知らない。呪文の一種で相手の呪文を跳ね返す効果を持つ。
リフレクの呪文バージョン。
しかし、呪文を跳ね返す効果は持つが、魔法は跳ね返せないのである。

羽入「マホカンタ。未知な魔法なのです。迂闊に魔法を使えないのです！」

ゲマ「私の本当の力を見せるわよ！！！」

ゲマは激しい炎を吐き出した。
その威力は燃え盛る火炎の比ではない
羽入の巫女服の魔力でも乱反射しきれず、結構効いてしまう程の威力っぽいようだ…

羽入「これだけやるのですか……良いでしょう、僕ももう少し本気で行くのです！！！　クエイラ！！！」

羽入はクエイクの強化された魔法。クエイラを放った。

それは浮遊している魔物には効かないが地面が盛り上がって、激しい炎をすぐ、消し去った。
そして、ゲマへ襲い掛かった！！！

ゲマ「ぐっ……この強さ、ひどいわ！！！」

羽入「この程度、僕の手の内の1割も出していないのです！どうしますか？」

ゲマ「私の最強技（冷たく輝く息）を見せてあげる！！！」

ゲマは口から全てが凍りつくほどの強力な吹雪を吐き出した。
その吹雪は周りの地形を凍りつかせるまでになる……

羽入「これぐらい、僕には無駄無駄無駄無駄ァなのです☆」

羽入はホーリーを唱えた。
ホーリーは聖魔法でフレアやメテオなどと同位置の強力な魔法。
この魔法は切り札にもなるぐらいの技であった。

周りの氷はホーリーの聖なる力により、消滅し、冷たく輝く息もホーリーの力の前に消滅し、ゲマへ聖なる力が注ぎ込んだ……

ゲマ「私は……やられぬ。ケフカ様の為にも……任務を……すい……こ……う……す……」

ゲマは倒れた。

羽入「悪の根源も倒したのです、あとは梨花達を待つのです☆」

第２５話　非情なる・・・　羽入との戦い

俺は前原圭一。
今、この山道の地下深くまで行っている。
この山道の奥深くに俺たちを同士討ちをしたボス。ゲマがいる。

圭一「梨花、俺たちは…どうして…こんな事になってしまったんだろう！」

梨花「多分、悪の根源、悪の首領が蒔いた種だと僕は思うのです」

梨花ちゃんの言う通りかもしれない。
ゲマは手下で真の悪が存在しているのかもしれない……

レナ「圭一君と沙都子ちゃん、どうして入れ替わっちゃったんだろう…」

梨花「それは…羽入のいたずらだと思うのです。羽入は神様だから、たまにはこんな事をしちゃうのです」

梨花は羽入の事を悪く言わない。
俺は羽入が敵なのか、味方なのかはわからない。
でも、梨花にとっては神様だと言っているのでとても大切なものなんだと思う。

俺たちは山道の奥深くまで進むと、一人の少女がいた。

羽入「ゲマは僕が倒したのです！」

えっ…俺たちを疑心暗鬼にして、俺たちが戦いあった原因のゲマが倒されている。
あの羽入が倒したのか。いいや、その場合、羽入が敵と言う事も有り得る。

羽入「圭一、あまり頭に血をのぼらせない方がいいかもしれませんよ」

羽入、お前が、俺たちを苦しめたのか。
そうだと思う。俺たちを入れ替え、ゲマを手下にし、注射で俺、沙都子、詩音を疑心暗鬼にし、同士討ちさせた。
それら全部、羽入。お前がしたのか！！！

俺は羽入を倒す。それしかない！

圭一「俺は羽入を倒す。悪の根源は羽入。お前だッ！！！」

俺はナイズ・ベーキを放った。
その炎の威力はファイガよりも高い。

羽入「圭一、僕を狙ってくるのですね。それなら、僕は圭一を倒すっ！　ウォータガ！！！」

羽入は強力な水を呼び出した。
その水とナイズ・ベーキは相殺した。

圭一「なっ…前原圭一の覚悟はこの程度だったのか、いや、俺は羽入を倒す。絶対に…」

羽入「もはや何も言いますまい、みんなで私を倒して見なさい！！

！」

レナ、魅音、詩音、沙都子、悟史、東城つかさ、北大路ゆい、梨花、みんなで羽入をやっつけようぜ！！！

梨花「ボクは傍観しているのです。羽入を傷つけたくないのです」

梨花ちゃんにとっては羽入は悪者だとは思わない。
でも、羽入が悪者ではないとしたら、誰が悪者なのかはわからない。
羽入を倒せば、悪者の情報も良くわかるかもしれない。

俺は羽入を倒す。前原圭一行きまーす！！！
沙都子の体とはいえ、魔法などは使えないわけではない。体力がなくたって、沙都子と違ってトラップを使えなくたって、俺にしか出来ないこともあるんだ！！！

沙都子「圭一さん、そうだよ。私だって、ついていますから！！！」

レナ「圭一くん。私も戦う。羽入ちゃんには負けない」

魅音「おじさんも活躍するんだからね！！！」

詩音「お姉には負けない！」

悟史「羽入と言ったか！　僕は負けるつもりは無い」

クラウド「俺たちは、真実へ行くんだ」

ルーネス「俺は負けたくない。皆と一緒に羽入を倒すんだ！！！」

みんなの声も聞き、俺は羽入との最終決戦へと戦いを始めた……

第２５話　非情なる・・・　羽入との戦い（後書き）

圭一は勘違いをし、非情にも羽入との戦闘となった。
物語もいよいよクライマックス。

この戦いが終わったら次章に進むと思います。多分・・・

第２６話　鬼狩柳桜

羽入「僕とみんなの戦いですね。いいのです！」

羽入は余裕な笑みをしている……

まず、レナが攻撃を仕掛けた。

レナ「リミット解除！　ブレイバー！！！」

レナは手に大量の力を集め、一気に一閃する。

羽入は手からエアロガを放ち、レナの攻撃と相殺した。

魅音「おじさんがいくよぉーー」

魅音は右手にダガー、左手にマインゴーシュを持ち、羽入へと攻撃を仕掛けた。

羽入は鬼狩柳桜（おにがりのりゅうおう）を持ち、魅音の攻撃を受け流し、攻撃を放つ。

羽入「この程度の武器での攻撃……　僕には効かないのです！」

魅音「でも、おじさんのマインゴーシュは防御も出来る。君には負けないよっ！！！」

羽入と魅音の攻撃が続く中、羽入は転んでしまった……

羽入「ぐっ……　トラップなのですか」

羽入はトラップを踏んでいたようだ……

そのトラップは転び、その転んだ対象に大量の槍が襲い掛かった。

沙都子「やったぜ！」

羽入「この程度の攻撃！。バリアを使ったし、あまり…」

この槍には猛毒が塗られていた。

羽入にはわからなかったようだ……

羽入「この感じ！？、猛毒なのですね。エスナを唱えるしかないのです！！！」

羽入はエスナを唱えようと詠唱を始めた。

詩音「隙ありっ！！！」

詩音はスタンガンを羽入へと放った。

羽入は痺れ、動けなくなった。

羽入「おのれぇー、この私を此処まで追い詰めるとは……　オヤシロモード解禁！！！」

羽入は今よりも強大な力、魔力に満ち溢れた。

毒や麻痺は消え、髪は一部逆立ち、そして赤紫っぽくなった。

目つきも怖くなり、まるで鬼のようだ……

羽入「アースシェイカー！！！」

地震が起きた。

俺たちにはかなりのダメージだった。

悟史「僕のエクスカリバーの力を受けてみろ！！！」

羽入「それ…エクスカリパーだから！！！！！」

羽入は悟史の武器がエクスカリパーだとわかった。
悟史は羽入に１２ポイントのダメージを与えた。

羽入「エクスカリパーは常人が使った場合確実に１ダメージ。それなのにこれだけのダメージを与えてくるとは。凄い剣の使い手だと褒めておこう……」

羽入はそう良い、真空波を放った。
悟史は真空波をモロに食らってしまった。

悟史「ぐっ……」

沙都子「よ…よくも、私のにーにーを！！！」

沙都子はエクスカリバットで羽入へと攻撃を放つ。

羽入「エクスカリバット……錆び、力を失っている。この状態じゃブロードソードよりも弱いっ！！！」

羽入は鬼狩柳桜で沙都子を斬りつけた。
致命傷は外れたが、当分は動けないほどのダメージだった。

ルーネス「ハイパよ、我らの元へ！！！　ハイパ召喚」

ハイパが現れ、羽入へ地属性の攻撃を放った。

羽入「私は浮く事も簡単に出来る。地属性の攻撃は効かないっ！！！」

クラウド「北大路、ナイス！　リミット解除・クライムハザード！！！」

東城つかさはリミットを解除した。
このリミットはレベル２のようだ……
助走し、羽入へと斬りつけた。

羽入「見誤るとは……。でも、この程度なら私は大丈夫っ！！！」

これだけの攻撃を受けても羽入は倒れない。
もしかして、不死身なのか・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1526d/

ひぐらしのなく頃に　最語

2011年11月27日10時00分発行